

食生活の構造に関する研究

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	坂本, 美智子 泉谷, 希光
巻/号	34号
掲載ページ	p. 28-36
発行年月	1973年10月

食生活の構造に関する研究

一：米食の機能について：一

共立女子大学 坂 本 美智子
泉 谷 希 光

Study's on Food Life Structure

: Fancion of Rice-eating Pattern :

Kyoritsu Women's University

Michiko Sakamoto

Maremitsu Izumitani

I. 緒 論

食生活において、食物の中心的役割を果たす食物は生命の維持と再生産、労働に最もよく対応した栄養素供給源でなければならない。いかなる食物（生物）も蛋白質を持っているので栄養素供給源は主としてエネルギー供給源と考えればよい。歴史的には、地域社会において生産されるエネルギー供給源の総量が、その社会の人口、生命体の寿命、再生産力を生物的に決定してきたと考えられる。その中心的食物の栽培過程と労働の存在形態によって、その社会特有の文化が形成されたと考えられるのである。

日本において近世以降そのエネルギー源となった食物は地域差はあるが、アワ、ヒエ、モロコシ、ソバ、麦、大豆などの雑穀と米である。したがって労働を媒介としての文化の諸形態も、この雑穀と米を通して形成されたと考えてもよいと思われる。現代に至って、多くの地域社会において雑穀型食生活から米食型食生活へ移行したことは承知の事実であるが、食生活を文化的存在として捉えた場合、雑穀型の食生活と米食型の食生活との間には明らかに相違があると予想せざるを得ない。

アワ、ヒエなどの雑穀が東北地方においてごく最近までエネルギーおよび蛋白質源として大きな価値をもっていたことはよく知られており、それが戦後の農政と稲の急速な品種改良によって、この10数年の間にアワ、ヒエ型食生活から米型食生活へ変化したのである。米と小麦が、「めし」、「パン」として文化的に異質であるように、米とアワ、ヒエも程度の差こそあれ異質のものと考えざるを得ないのである。

しかしながら、日本に古来から“めし文化”がある

ためか日本人の意識のなかに日本人は“めし”を食べるものという強い規定観念が存在したためであろう。アワ、ヒエから米への移行はほとんど抵抗なく進行したのである。このことは、めしがアワ、ヒエより旨いということだけではなく、“めし文化”をもった者がアワ、ヒエ文化を否定してきたために持たれたものとも考えることもできる。すなわち、米文化圏から離れることはある種の劣等感につながっていたという事情も考えられるということである。

いずれにせよ歴史的過程の中で急速に食生活における中心食物が変化したのであるから、それをとりまく文化的構造に多くの影響を与えたであろう。

このような認識に基づき“めし文化”について生活科学的解析を試みようとする本研究に着手したのである。

II. 問題の視点

1) 米とめし

日本の稲作経営は、現在に至ってもその零細性から生産性が低く、省力化が進行していないか、しにくい土地についての労働投下量は著しく高い。それらの土地所有の諸条件と政策の特殊性から国際的には非常に高い米価をもたらしている。

一方、戦後海外資本のバックアップを受けながら急速に発展した企業資本は労働力需要を増加し賃金労働者を広く農村に求めなければ支えられない状況をもたらしたのである。そのことが、生産性の低い農業所得と都市勤労所得との格差を高める結果を招いたといえるであろう。

近年に至って、米の生産性が向上し農家所得は高くなったが米価とその他の農業生産物の価格はおさえら

れ都市経済はますます労働力の需要を高め、景気変動に対応した臨時労働力として所得の伸び悩みの中にある農村の労働力を必要としたために兼業農家の増大をもたらしたのである。その背景には、労働力が都市に吸収されるのに見合った稲作作業の省力化が進行し兼業農家という日本特有の構造が可能になったということがある。このような、農村の労働形態の変化の中で都市と直接、間接に交渉をもった農民の欲求は食生活に反映し、また経済的要求が都市的段階に同質化したと考えられる。このような条件下において、稲作農家も「米」および「めし」に対する現実的、意識的欲求が変化したであろうことが予想される。

以上のように、日本における資本主義社会としての発展が急速であったように、稲作を起点とした農業の発展の速度も異状に早く、その結果、農民がというより日本人が持つ米に対する認識と「めし」に対する認識との間に異状な程の経済価値的接近がみられる。

すなわち、米もめしも同様な経済的評価が可能な社会に変化し農民にとって過去に米は封建体制のなかで存在したもので、「めし」は文化的に存在したものであったであろうことの基盤がくずれさったのである。

ここで本報で問題視する視点の一つであるところの「米」と「めし」の認識をメルクマールとした食生活研究の方法論が展開されるのである。

2) 米摂取量と労働条件

稲作に対する労働投下量が多大であるにもかかわらず、その生産された米が農民にとって直接の労働再生産としてのエネルギー供給源の意味をもたなかった時代においては、めし文化の形成よりも、むしろ稲作労働文化としての形成過程であったと認識されよう。そのような稲作労働文化が、農業機械の導入と稲の品種改良によって失われ、その代償として農民はハレ食としてのめし文化（権力文化）から日常的めし文化へ移行することが出来たと考えられる。

そのような変化が起ったのは東北農村においてはごく近年のことであり、それ以前の農村社会における稲作はその農村社会に存在するための人間的、社会的条件であったに過ぎないと考えられる。すなわち日本の米作農家は、この一世紀の間に村落共同体に生存するための稲作から日常的「めし文化」を充足することと

同時に経済的要求を充すための稲作、そして生活の単なる一経済手段としての稲作へと3段階を経てきたのである。この様な、稲作を起点としての社会的変化が農民の「めし」に対するイメージを強く変化させたと考えられる。これらは労働条件の変化によってもたらされたものであろうと推定されるのである。

なお、日本における米の摂取量は依然として大きな位置をしめ食生活上、また生理学上大きな役割を果している。

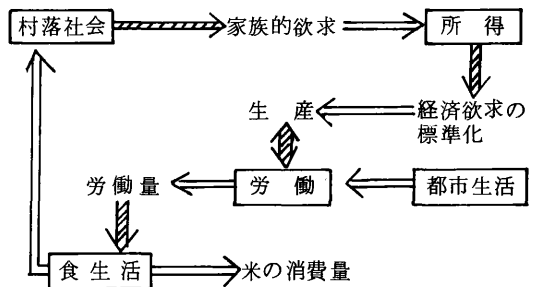
第1表 食生活において消費される米が熱量としてしめる割合（昭和43年1人1日当たり）

全国平均	46.9%
農家平均	52.1%
東北農家平均	51.1%

第1表から日本人の食生活において消費される米に依存する熱量の割合が大きいことと農家はさらに熱量依存度の高いことが判る。このことから、農家で食べる米の量は労働量と相関していると考えられ、熱量としてしめる割合が高いことから米の消費量は労働条件に強く規制されたものと考えられる。

すなわち稲作農家の労働条件が与える自家消費米への影響とし次の図のような諸因子とその因果関係が考えられるのである。

第1図 稲作農家の労働条件が与える自家消費米への影響



3) めしと保有米

農家にとって稲作とは、前節で述べたように歴史的に希求された生産文化に他ならなかった。従って稲作に限っては適地適作などという類の生産物ではなく、農民と国家とが最大限の努力をして不適地においても

稲作をしてきたのである。急傾斜地、寒冷地、水不足地帯において、今日稲作が可能になったのは日本農民の願望と、国民の米食文化への欲求と、さらに国家権力の力を背景とした相剽的現象とみなすことができるであろう。

戦後における稲の品種改良と、買上げ保証は稲作に大きな影響を与え稲作農家が日本の農業を代表していると言える程になったのである。

なお、農地解放以前は稲は米として販売されてきたものであり、多くの農家（特に小作農家、小自作農家）にとっては、米が自給米すなわち“めし”としての機能をもつものではなかった。しかしながら現在の農家にとって米とは農産物として収入源となるものを保有米として自家消費されるものと分離されてきた。過去における保有米とは種もみと商品価値を殆んどもたない碎米などの下級米であったが、今日における保有米とは自家生産される米穀の中で最も良質の米が保有される傾向が出てきたのが特徴である。これらの現象は第2表、第3表に示すように収穫量の増加と消費量の低下によるものである。

第2表 水陸稲収穫量の推移

昭和35	1 2,858	千トン
" 40	1 2,409	
" 41	1 2,745	
" 42	1 4,453	
" 43	1 4,449	
" 44	1 4,003	
" 45	1 2,689	
" 46	1 0,887	

第3表 日本の米穀生産・消費量

	米生産量kg	米消費量 kg	
	全国平均一人当たり	農家一人当たり	非農家一人当たり
昭和35年	137.6	160.1	126.3
40	126.3	150.4	117.4
42	144.3	145.9	108.6
45	122.3	133.3	-

保有米とは、本来冷害や不作による米の減産、不足

を考慮しての保存米としての意味をもっているが、時代によっては生きるためと権力者の収奪により、生産した米をできるだけ手離さなければならず、保有米には碎米などの悪い米が残されていたのである。

以上のべてきたように、保有米の量的質的变化が新たなめし文化を形成したと考えてよいと思われる。さらに稲作の安定と兼業による収入増は消費型の方向を、地域によっては強め自家生産の、まずい米を売って良質米を買うというような傾向すら見られるようになった。

一方、米穀生産量の増加のみによって必ずしも農家経済は豊かになったわけではなく、水田所有面積の少ない農家および反当り収量の少ない土地では米が農家の要求する所得に対応するだけの収入源となっていないのが実状である。そのような稲作の状況下では農家は保有米をできるだけ少なくし販米量を増加させることによって稲作収入充足率を上昇させることと、農家所得を農外所得により補わなければならないこととなったのである。

第4表 45年度農家経済

単位：1000円

	農業所得	農外所得	農家所得	家計費	農業依存度	農業所得による家計費充足率
全 国	508.0	898.5	1406.5	1229.7	% 36.1	% 41.3
都府県	486.9	916.6	1403.5	1228.3	34.7	39.6
0.1~0.3ha	82.2	1305.5	1387.7	1196.1	5.9	6.9
0.3~0.5	163.1	1199.0	1362.1	1181.6	12.0	13.8
0.5~1.0	384.7	957.0	1341.7	1187.2	28.7	32.4
1.0~1.5	727.8	694.1	1421.9	1255.8	51.2	58.0
1.5~2.0	952.7	513.5	1466.2	1299.2	65.0	73.3
2.0~	1288.6	397.6	1686.2	1419.3	76.4	90.8
東 北	648.6	678.4	1327.0	1206.6	48.9	53.8

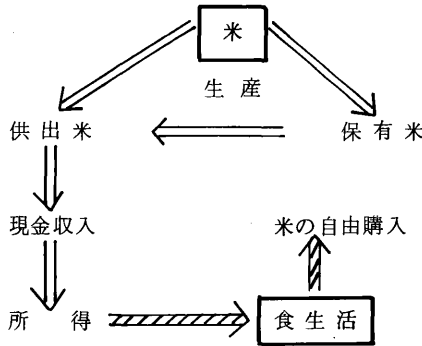
農家所得の増加は食生活において食品を購入する形態を促進させる力となった。長い間自給自足型の農家食生活を営んできた農村にも食品市場は拡大され食物の消費形態を変化させた。

このように、農家では米の生産に関する農政と流通価格の統制などにより自家消費米への意識を変えざるを得なくなった。米の品種、生産技術の変化により品質の差を知らされ自家消費米には良質な米を保有する傾向となったのである。すなわち保有米とは農家にと

って「めし」としての価値を強く持ち始め、この点においては農家で「米」と「めし」を区別して認識するようになったと考えられる。

農家の自給自足型の生産と消費が稲作を通して積極的な消費形態へと変化する傾向がみられ、このことを米穀に対する価値変化をして第2図に示すように捉え農村食生活の文化的規制因子の形態的変革とみなした。

第2図 米穀の価値変化が与える食生活への影響



III. 目的

前節でのべたように農村における食生活構造の文化的認識指標として「稲作文化」と「めし文化」の相違点を明らかにし、さらに「めし文化」の食生活における機能を明らかにしようと考え調査を計画した。しかしながら急速に発展した稲作農業文化の影響は余りにも大きく、当初の目的を達成するにはいたらなかった。しかし研究方法の一つの議論としてこの報告をすることに多少の価値があると考え本報を公にする次第である。

IV. 調査方法

- 1) 調査地：岩手県九戸郡軽米町字上館笹渡
- 2) 調査対象者：無作為抽出した25戸の農家の炊事担当者および世帯主
- 3) 調査方法：昭和46・47年夏期、米穀の消費に関する面接調査を行なった。

V. 調査地の概況

九戸郡は岩手県の最北部に位置し青森県三戸郡に隣接している。軽米町はその中心地まで国鉄金田一駅よりバスで約1時間の道程にある。人口は16,229人

(昭和46年8月1日現在)で世帯数は3,429戸、その内農家が2千戸余りをしめる農山村である。

調査対象農家のある笹渡地区は軽米町の中心より北東に7.5~10Kmの山間部に位置している。交通の便は悪く久慈市に通じる県道から徒歩3~4時間の山村僻地である。但し八戸市と大野村を結ぶ県道が部落を縦断しており八戸市からバスが入っているために商業圏、医療施設などに対して軽米町より八戸市と接触することの方が多い。

笹渡学区としては高柳、鶴飼、笹渡、百鳥の4部落からなり笹渡部落がその中心となっており学校や商店があるために、ここは非農家の多い部落である。

軽米町は気象が不安定な地域である。三陸海岸に近いために北東の風が襲来し特に東北部にあたる笹渡地区では山背風海霧の影響をうけ、しばしば作物への被害がみられる。

以上のような立地条件から農家は多角経営の傾向にあり酪農々家が多い。

第5表 軽米町専兼業別農家数(戸)

(農業基本調査より)

年度	総農家数	専業農家数	兼業農家数		
			小計	第一種兼業	第二種兼業
S35	2036	965	1071	777	294
40	2024	739	1285	839	446
42	2025	677	1348	791	557
45	2025	465	1560	887	673

第6表 軽米町耕地面積 ha

(センサスおよび農業基本調査より)

年次	水田	普通畑	牧草地	樹園地	合計	草地	山林
昭和35年	526.3	211.4	1.1	10.1	2741.9	530.9	10492.3
40	633.5	188.9	1.1	11.5	2669.2	475.1	-
42	715.4	165.6	1.5	9.4	2620.7	-	-
45	852.1	145.1	21.5	13.9	2650.1	311.9	11090.3

第7表 軽米町における主要作物の作付面積 ha

(農業基本調査より)

年次	水稲	小麦	大豆	ホップ	リンゴ	たばこ	加工トマト
昭和35年	498.6	643.2	586.4	-	96.6	85.0	-
40	596.7	524.3	529.9	5.2	88.6	240.1	1.0
42	698.5	470.8	500.0	4.7	90.7	211.1	8.0
45	928.4	381.2	371.4	4.2	83.1	161.1	16.2

第8表 笹渡地区農業集落の概況

(1970年農業センサスより)

	農家数 戸	非農家 戸	総戸数 戸	専業 農家数	兼業 農家数	第1種 兼業農家	第2種 兼業農家
高柳	32	-	32	3	29	22	7
鶴飼	34	3	37	3	31	25	6
笹渡	37	19	56	9	28	21	7
百鳥	6	2	8	3	3	3	0
調査農家	25	-	25	4	21	16	5

第10表 笹渡地区作物別販売農家教(戸)

(1970年農業センサスより)

	全農 家数	水稻	小麦	雑穀ト ウモロコ シその他	はひい し	大豆	小麦	たばこ	トマト
高柳	32	27	21	20	20	24	11	9	0
鶴飼	34	28	23	17	7	14	14	7	1
笹渡	37	24	13	11	2	8	2	1	3
百鳥	6	1	4	6	1	4	0	0	0
調査農家	25	25	4	5	1	6	4	5	3

第9表 笹渡地区経営耕地規模別農家数(戸)

(1970年農業センサスより)

	全農 家数	例外 規定	0.1 0.3 ha	0.2 0.5	0.5 0.7	0.7 1.0	1.0 1.5	1.5 2.0	2.0 2.5	2.5 3.0	3.0 5.0	5.0 ha
高柳	32	-	-	1	2	4	7	8	4	2	4	-
鶴飼	34	-	2	1	-	3	6	-	7	5	8	2
笹渡	37	1	1	-	2	5	12	5	5	3	3	-
百鳥	6	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-
調査農家	25	-	-	-	1	1	3	4	4	3	3	2

VI. 調査農家の概況

資料：東北農業試験場経営部

農 家	経営耕 地 ha	水田 ha	普通畑 ha	飼料畑 ha	山林 ha	乳牛 頭	肥育 牛	馬 頭	専 業 別	兼業職種 内容	家族構成* (S46.9現)	
											期	労働者
1	5.1	2.1	1.0	2.0	1530		4		i 兼 運 転(随時)	M75 ○fm54 × m26 fm24	FM72 m 4 m 2	
2	5.0	0.8	3.0	1.2	262	4			専業 土 工(不定)	m55 ○fm54 × m31 fm23	m14 fm13 m 1	
3	4.6	1.1	* -	3.3	6	8			i 兼 セメント工(農閑)	○FM66 × m44 m43	m15 m10 fm 5	
4	4.0	1.5	1.0	2.5	14	15			i 兼 セメント工(運転)	× m44 ○fm39 × m23	m14	
5	3.6	1.2	0.6	1.8	8	8			i 兼 セメント工(冬期)	m48 ○fm46 × m23 fm22	m 2	
6	3.4	1.2	0.4	1.8	572	8			i 兼 土 工(農閑)	× m58 ○fm53 m33 fm33	m13 m12 fm6	
7	3.4	1.4	1.0	1.0	35	6			i 兼 土 工(冬期)	m61 ○fm54 × m37 fm37	m13 fm 7 m5	
8	32.5	0.85	*0.7	1.3	171	4			専業	○FM60 m38 fm36	fm15 m10 fm6 fm2	
9	3.2	1.0	1.2	1.0	178		1		i 兼 土 工	○FM55 × m36 fm36	fm14 m10 m6	
10	3.05	0.15	0	2.8	50	5			専業	m55 ○fm54		
11	2.96	0.5	1.0	1.3	0.7	3			i 兼 水産加工(職員)	m62 ○fm59 × m38 fm37	m14	
12	2.9	1.0	0.7	1.2	93		10		i 兼 農 協(職員)	m75 FM74 × m40 fm40 m21 ○FM47	m15 fm13 m7	
13	2.5	1.0	1.5	-	109.1		1		専業	m61 ○fm62 × m38 fm33	m14 fm12 m9	
14	2.46	0.26	0.4	1.8	-	9			i 兼 集乳運搬(年間)	○FM54 × m35 fm33	m14 fm12 m8 m5	
15	2.37	0.57	0.2	1.6	8.5	8			i 兼 ダンプ運転(年間)	m46 ○fm48 × m24	fm14	
16	2.0	0.9	0.8	0.3	8.5		2		i 兼 荷 役(農閑)	○ m39 × fm38	fm11 m8 m3	
17	1.99	0.47	1.14	0.2	2.8		1 1		i 兼 土 工(出稼90日)	m49 ○fm47 m30 fm22	M65 FM70 m3	
18	1.9	1.1	0.4	0.4	9		5 1		i 兼 大工運転(冬)	○fm50 × m20	m62 F fm11 m9	
19	1.7	1.3	0.4	-	-		-		ii 兼 大工荷役(半年)	FM74 × m49 ○fm40	fm12 m10 fm8 fm6 fm3	
20	1.63	0.58	0.85	0.2	9		4		i 兼 土 工(冬期)	○FM53 × m29 fm28	fm8 fm5 m1	
21	1.4	0.6	*0.57	-	1		1		i 兼 土 工(年間出稼)	○FM65 × m45 fm43	m13 fm 9	
22	1.4	0.4	0.8	0.2	-		1		ii 兼 土 工(年間)	○ m47 × m45	m13 m 5	
23	1.2	0.7	0.35	-	7.2		1		ii 兼 土 工(年間)	○FM55 × m33 fm32	fm11 m7 fm2	
24	0.98	0.48	0.50	-	3.8		1 1		ii 兼 タバコ屋(職員)	m68 ○fm62 × m38 fm37	fm14 m11 m7 fm4	
25	0.43	0.08	0.25	0.1	6		1		ii 兼 漁 業 船(年間)	○f m40	m14	

* タバコ畑 or 加工トマト畑所有

* M: 世帯主の父 m: 男子 数字: 満年齢
FM: " 母 fm: 女子 ○炊事担当者

× 兼業郎務者

Ⅶ 調査結果および考察

1) 笹渡地区における食生活の中心的エネルギーおよび蛋白質給源としての食物は、昭和30年代までアワ、ヒエなどの雑穀のみがその混合食形態であったとみられている。それが寒冷地適作米としてのフジミノリやシモキタなどの品種が導入され今日では自家消費米はもちろんのこと、相当量の販売が可能となるまでに至った地区である。

この意味で笹渡地区は歴史的なめし文化を殆んどもっていない地域と考えてよい。しかし米を全く食べていなかったわけではなく、沢水を利用してごくわずかに得られた品質の悪い米はあったようである。それらの米は笹渡地区農民にとって、ごく貴重なものであり、正月などハレの日以外には食べられないものであったということが確認された。このような状況下において炊事担当者の米に対する意識が高く出てくるものと推測されたが10年間ほどの間に起った雑穀食形態から米食形態への急速な移行にもかかわらず白米食が日常的に食べられることについての意識は聞き取り調査における潜在意識の刺激によっても得られなかったのである。

笹渡地区においては、現在小学校高学年の児童ですらヒエ飯を体験しているのであるから“めし”に対する意識は先に述べた様に当然高く、又ヒエ飯段階からの特徴的な献立の変化が文化的に確認されると考えられたがこの問題についても一、二の農家を除いてほとんど献立パターンの変化につながっていないことが確認された。

すなわち、笹渡地区における“めし”に対する意識は単に“めしが食べられるようになった”ということによって充足された文化段階としてのめし文化しか存在しないと考えられる。その結果、当村落社会的欲求全体が自家消費米を作るか否かという問題としてしか動いていない地域であるにとらえられた。

2) 第12表に示すとおり当地区におけるの稲作経営の目標は、ほとんどの農家が兼業農家にもかかわらず自給米は完全に確保しさらに出来れば販米もつくりたいという意向が強い。そのことが調査結果に得られたように、うまい米イコール自給生産米という意識につながって現われている。調査地区ではシモキタ種がう

まい米として認識されているが軽米町の消費者は決してシモキタ種をうまい米としておらず、町民によっては県南米をうまい米として購入している例も多数みられるようである。

第12表 保有米量と稲作志向

農家	45年 供出 米俵	保有米量		将来の米作	
		44年 (俵)	45年 (俵)	自給 米のみ	自・供 とも
1	101	40	-		○
2	35	44	40	○	
3	28	50	50		○
4	69	-	120		○
5	50	40	-		○
6	75	40	40		○
7	62	32	50		○
8	50	27	23	○	
9	40	-	-	-	-
10	なし	-	-	○	
11	13	13	-	○	
12	-	20	-	-	-
13	58	80	80		○
14	なし	-	30	○	
15	なし	9	-		○
16	55	-	-		○
17	15	-	70		○
18	45	-	9		○
19	49	-	50		○
20	なし	6.8	-		○
21	20	15	20		○
22	23	-	2	○	
23	30	30	40		○
24	10	-	-	○	
25	なし	4	8	○	

- : ?

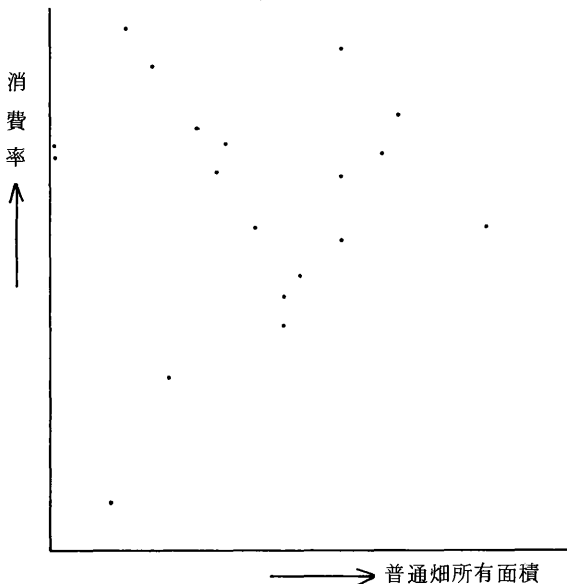
このような結果から1)において述べたように歴史的な自給自足形態が根強く残っており、よりうまいめしに対する、またよりうまいめしの食べ方に対する文化的欲求の低さをもっているものと思われる。数例ではあるが、自家消費米と販米とを区別している事例があるが、このような事例はあくまでも経済的欲求の、米に対する対応であり、めしに対する文化的欲求のあらわれとは認識しがたい。しかしながら、めし文化へ

の欲求が多少とも現われる起因が内在すると考えれば、考えられないこともないと思われる。

3) 炊事担当者の、「めしをおいしく食べる」ための主要因は「副食」であるという回答を得たが、その副食は、めしであることによって特別に考えられた副食とは言いがたい。副食については更に細部にわたって調査しなければ理解されないが、この一時点においての結果からは、米食と副食との関係に形成された特有のパターンは存在しないと考えられる。従って今後の食生活の変動要因は、めしパターンを形成していないだけに調査地の社会環境の変化、労働条件の変化などによって容易に影響をうけていくであろうことが予想された。

4) 調査地の農家における米の消費量は第13表に示すとおり兼業の種類、稲作労働などと殆んど相関関係がみられず、たゞ畑作に対する幾何相関を求めた場合にのみ昭和20年代における平均稲作農民の米穀摂取量構造と類似の相関々係がみられた。(第3図) しかし全体として労働量に対する米穀のエネルギー供給率は大きなバラツキをみせ、この村落社会に統一的な食形態がなく米に対する家族的欲求の個性が見られることは特徴的な結果とみなされる。

第3図 畑作階層別、米穀摂取量



第13表 対象農家の米穀摂取量

農家	米の消費量 (S46.9現)			
	労働者 平均年令	炊飯量 (1日)Kg	成人換算 員数人	家族1人 1日あたり 平均g
1	44.57	2.24	4.94	453.4
2	40.75	3.08	6.22	495.2
3	51.00	2.80	4.90	571.4
4	35.33	1.96	3.80	515.8
5	34.75	2.10	3.96	530.3
6	44.25	2.10	5.98	351.2
7	47.25	2.80	5.62	498.2
8	44.67	1.82	5.50	330.9
9	42.67	2.80	4.98	562.2
10	54.50	0.84	1.60	525.0
11	51.25	2.90	4.36	665.1
12	49.50	3.50	7.60	460.5
13	48.50	2.80	6.06	462.0
14	40.67	2.10	5.80	362.1
15	39.33	1.40	3.66	382.5
16	38.50	1.68	3.94	426.4
17	37.00	2.52	4.86	518.5
18	35.00	0.98	4.22	232.2
19	52.67	2.38	5.92	402.0
20	36.67	1.82	4.18	435.4
21	51.00	2.10	4.16	504.8
22	46.00	1.40	3.36	416.7
23	40.00	2.90	4.54	638.8
24	51.25	3.50	6.40	546.9
25	40.00	1.12	1.84	608.7

この結果を評価することは現段階では非常に危険であるが、一応米食文化の歴史的脆弱性によるものと推定される。

5) めしの炊き方について聞き取り調査を行なった結果、ほとんどの対象者がツバ釜で炊くことがおいしいと言っており、このことは電気釜などが出現したときにおける日本人の一般的評価と同様の結果が得られている。対象農家にはほとんどガス釜あるいは電気釜が購入されているが、その使用は忙しいときに用いるという回答者が多く、その回答のみから類推すれば暇があれば出来るだけ、うまいめしを食べようという欲求の現われと評価されるが、労働条件などの調査とつぎ合せて考察するとガス釜または電気釜を用いるのは経済的な要素が強いとみられ、将来当地の所得が上昇すれば必然的に電気およびガス釜に移行すると考えられる。

第14表 炊飯手段の導入

農家	炊飯用設備年度		
	水道	プロパンガス	電ガス釜
1	S年42	43	0
2	40	40	44
3	43	40	-
4	42	41	47
5	41	41	-
6	35	40	0
7	42	41	46
8	38	40	-
9	39	44	44
10	41	38	40
11	38	38	-
12	35	40	0
13	36	-	-
14	36	41	46
15	42	43	-
16	36	40	-
17	42	44	43
18	35	40	43
19	-	41	-
20	38	36	-
21	37	40	-
22	36	40	46
23	38	40	-
24	-	42	-
25	35	43	43

○：有 -：？

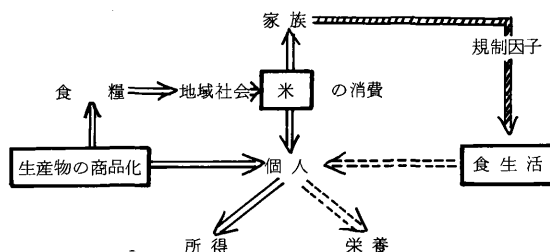
Ⅷ. 総括

以上の調査結果より軽米町笹渡地区における米の位置づけは、やはり社会経済的要素が最も強く、めし文化を基底とした稲作は、ほとんどその存在が認められなかった。

笹渡地区における調理担当者の意識は調査者の意識によく対応して得られ、そのことは調査者が“めし”を文化的存在として規定しながらめしについての意識に求めれば、それに対応し、経済的手段としての米としてその意識を調査すれば、よくそれに対応してくるというように、意識的には現代社会の都市・農村がもつ、文明化された文化的欲求の意識構造によく対応したことが明らかとなった。このような構造は第4図に示すように本質的な食生活規制因子としてのめし、ではなく社会的流動の中に点として存在する米が、食生

活の主体的要求であるところの生物性の強いエネルギー要求を充す構造にくみいれられているとみなされた。

第4図 調査地における米の位置



この調査の目的と問題意識であった農家における米の位置づけは、はっきり“稲作文化”と“めし文化”に分離できることを予測し調査結果を考察したのであるが、笹渡地区においてこの分離が不可能であったことから予測された研究方法および視点が、逆説的には有意であることが確認された。

おわりに

この研究報告は、東北農業試験場経営部農家生活研究室の君塚正義室長をはじめ、橋本恵次氏、佐藤チセ氏、神谷一夫氏の御指導、御助力と、東北農業試験場経営部の皆様の御協力によるものであります。また研究室の多くの貴重な資料を御提供いただきましたことを深く感謝する次第であります。

文献

- (1)生活研究方法論序説(日本農村生活研究第2巻 第1号 1958)
- (2)兼業農家の生活構造(東北農業試験場 1960)
- (3)生活構造序説(「家庭生活の構造」)好学社刊
- (4)農民の栄養と社会環境要因の実態(泉谷希光 山形県衛生部 1967)
- (5)農村社会の変貌と生活環境変化の諸問題(同上 1970)
- (6)農山村地域の開発方式に関する研究 - 軽米農業の現状と改善計画 - (東北農業試験場経営部 1966)
- (7)労働力流出と農村生活の変貌

- 岩手県軽米町における実態 -

(東北農業試験場経営部 1972)

(8)食生活からみた出稼農家の実態と今後の方向

(軽米町農業改良普及所, 軽米町農業
委員会 1971)

(9)近代食生活への道 (鷹嘴テル著「熊谷印刷出版部」)

(10)日本の民族「岩手」 (森口多里著「第一出版」)